

5. 今月のピックアップ「イチゴ萎黄病について」

◆イチゴ萎黄病とは？◆

イチゴ萎黄病は土壌伝染性の病害であり、苗や土壌を経由して伝染します。多発すると収穫量が大きく減少し、圃場に壊滅的な被害をもたらします。罹病性は品種によって差があり、近年三重県で普及が進む「かおり野」(図1)は、「章姫」と比べると本病を発病しやすい品種であるため、注意が必要です。

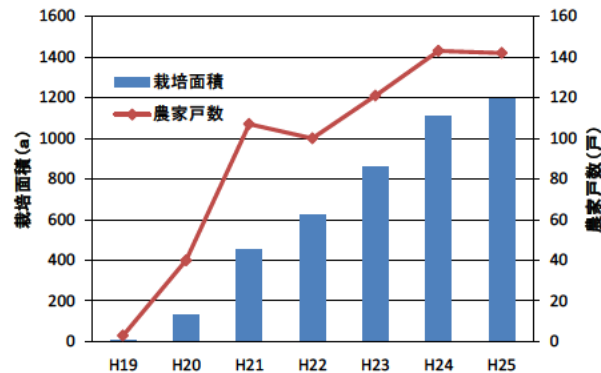


図1. 三重県における「かおり野」の栽培面積と農家戸数の推移
(三重県中央農業改良普及センター調べ)



図2. 萎黄病によるイチゴの葉の病徴
(三重県中央農業改良普及センター原図)
新葉の1~2葉が小型化して舟形になってねじれ、黄化する



図3. 萎黄病発病株のクラウン部切断面
(三重県農業研究所原図)
導管部分が褐色~黒褐色に変色する。発病株では根にほとんど新根が見られない

◆病徴と被害◆

新葉の奇形・黄化を生じ(図2)、その後株全体の生育は悪くなり、最後には枯死します。また、収穫期に発病すると、着果数が減り、果実の肥大が悪くなります。発病した株のクラウン部や葉柄を切断すると、導管の一部または全体が褐色~黒褐色に変色し、萎黄病の診断材料となります(図3)。

◆病原菌の生態と感染経路◆

本病の病原菌(*Fusarium oxysporum* f.sp.*fragariae*)はカビ(糸状菌)の一種で、病原菌はイチゴにのみ感染します。病原菌は耐久性の高い厚膜胞子を形成し、土壌中に長期間(数年間)残って伝染源となります。その後、イチゴの根から侵入し、導管を侵して発病します。導管内の菌糸はランナーに移行し、苗に感染拡大します。

◆発生しやすい条件◆

発病に最適な土壌温度は25~30℃です。真夏の7~8月頃に最も発病しやすくなります。また、本病の発病した圃場に連作すると被害が大きくなります。

◆防除対策◆

- 1) 親株には必ず無病株を選び、毎年更新しましょう。
- 2) 育苗圃では苗を十分に選抜し、本圃へ罹病株が持ち込まれることの無い様、注意しましょう。
- 3) 発病株は速やかに抜き取り、圃場に放置せず焼却しましょう。
- 4) 発病が見られた圃場では、次作の作付け前にクロルピクリン剤等で土壌消毒を行いましょう。
- 5) 発病のあった育苗トレイやポットは消毒を行い、育苗培土についても消毒するか、新しいものを使用しましょう。